

---

# いつまで

いえやす

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

いつまで

### 【Zコード】

Z7609D

### 【作者名】 いえやす

### 【あらすじ】

以津真天は、日本の妖怪。死体をそのまま放つておくと、「いつまで放つておくんだ」と残された親族の元に知らせにくる。そんな妖怪に出会った男の物語です。

『いつまで放つて置くんだ』

背後から知らない誰かの声がした。  
自宅の和室で押し入れに向かっているときで完全に油断していた。  
びっくりして声のした方に、ベランダに出てみたが、誰もいない。  
いるはずがない。

当たり前だ。ここはマンションの11階なのだから。

良く晴れた4月初めの朝。

ベランダには心地よい風が吹いていた。

どこか頭の方を、ばさばさと鳥が飛んでいくような羽音が聞こえる。

カラスだったのだろうか。鳴き声を聞き間違えたのだろうか。

「どうしたんですか？ あなた？ 朝ご飯できますよ」

妻の和子がキッチンから俺を呼んでいた。急がなければ。

「ああ。今行くよ」

部屋の中に戻り、開け放たれた押入れを前に考え込んだ。  
パズルのように隙間無く詰めこまれた収納物にうんざりとする。  
果たしていつたいどこから切り崩していくばいいものか。

「どうしたんですか？ あなた」

疲れを切らした和子が俺の様子を見に来た。

和子の中では一日のスケジュールが決まっている。

特に忙しい朝は全てが分単位、秒単位で進行している。

そしてその予定が上手く回らなくなると、とたんに機嫌が悪くなるのだ。

俺は慌てて弁解した。

「いやさ、実は昨日カバンが壊れて。

今日は古このを使おうと思つたんだけど

「もう。あなたつたら。

押し入れの中を勝手に荒らさないでつて何度も言つてるでしょ？

そういうことは昨日の内に言つておいてくださいよ。

私が探ししますから先に朝食食べて下さー」

追い払われるよつに行つたキッチンでは、一人息子の歩が先に朝食を食べていた。

「おはようございます。お父さん」

多少~~さすがに~~なく舌足らずな口調ながらしつかりと挨拶をしてくる。小学校受験のため、和子が歩に敬語を使つよつしつけてくるのだが。

正直、実の息子から丁寧に話しかけられるのは、なにやら気持ちが悪い。

歩自身は覚えたての言葉を使うのが面白いのか、窮屈そうな感じではないのだが。

「おはよう。塾はどんな感じだ？ 大変じゃないか？」

「ううう。楽しいですよ。お父さん」

嬉しそうに笑う。

勉強が楽しいなんていつたい誰に似たのか。

「はい。あなた。これでしょ」

戻ってきた和子が茶革のカバンを差し出した。

「ああ、ありがとう。よく見つけられたな」

本気でそう思った。

押し入れを開けたときのあの物の量。

の中からこんな短時間で見つけられるなんて。

「そりやそりですよ。

季節」と、毎回苦労して収納してゐるんですから。

何度もいいますけどあのを開けるときは一晩寝てください

ね。

「大丈夫です」

「ハイ

「ハイは伸ばさないの」

「じゃあ、早く歯を磨いてらっしゃい。遅れないようにこね

すかさず和子が注意する。

しかしその手は淀み無く動き、俺と歩、一人分の弁当をきつちつ作っていた。

「今日も遅いんですか？」

「そうだな。とりあえず月中まではこの調子かな？」

「そう……。

実は、昨日の夜はあなた遅かったから言わなかつたんだけど、お昼に三澤さんから電話があつたのよ」

和子は言ひにくそうに切り出した。

三澤といつのは、俺の母の姉にあたる人、俺の叔母だつた。母といつても、俺が中学の頃に家を出た人で、血の繋がりはあるものの、俺の中ではすでに他人だ。

そのためか母方の親類である三澤とも折り合ひは悪い。だいたい平日の昼間に家に電話して、会社勤めの俺がいるはずもないのに。

「三澤さんが？ 何の用だつたんだ？」

「それが、お義母さまから連絡がきてないかつて

「来てる訳ないだろ？」

「怒らないでよ。

あちらこもずいぶん長い間連絡が無いんですつて

「知るか。親父の葬式にも来なかつたんだから

「そんなこと言ひて……。

三澤さん、お義母さまが住んでいたアパートに行ってみたんです

つてよ。

そしたらもうすうと前に、引越ししていった

「えうか……。

最後に会ったのは、そつだなあ、親父がまだ生きていたころだつたから、もつ七年も前になるかなあ

「もうせんなになるかしづ？」

「ああ、親父の家にいた頃で、歩が生まれる前だ。お前もあの時いただろ？」「

「ああ、あのとき。  
あれから連絡ないんですか？」

「じこじこ越しした」とは、一応手紙を出しておこたんだがな

「そづ。だつたら心配ね

「別に。もう関係無いよ」

母は一種の病氣だつた。

若いころは美人と評判だつた母。

いつも生々しい騒動が絶えず、結局は家を出ていくことになつてしまつた。

それでも亡父は未練があつたのだろう。母が出ていった後も後妻をとることをしなかつた。

しかし、俺の方は違つていた。

ときおり思い出したように息子に会こに来たという名前で、父から金を引き出していく母のことがどうしても好きになれなかつた。

「お母さん、用意できましたよ」

歩が幼稚園の制服に着替えて、キッチンに入ってきた。

「歩、お前、いつのまに一人で着替えも準備もできるようになったんだ？ 偉いぞ」

頭をなでてやると歩はうれし恥ずかしそうにうつむいた。

「やだ。そんな子供じゃがないわよねえ？ 歩。……じゃあ、あなた。戸締まりお願いしますね」

和子は両手にゴミ袋を抱えて玄関に向かった。

マンションの隣りの公園前が、幼稚園の送迎バスの待ち合わせ場所になっている。

「ああ、いってらっしゃい。歩も、気を付けてな」

「いってきます。お父さん」

いつもの通りの朝、いつもと変わらぬ幸福な朝だった。

マンションを出ると、入口で管理人さんと会ってしまった。  
悪い人ではないが、話好きな初老の女性で急いでいる朝には会いたくない人だ。

「おはようございます」

「おはようございます。富沢さん。すっかり温かくなりましたね」

管理人さんは掃除の手を止めて挨拶を返してきた。

「もうございません、富沢さんとの奥さんおまちさん、北野医院  
でしかじらへ」

早速話題を振つてじられた。無視する訳にもいかない。

「ありますよ」

「あやこの院長さん。昨日おへくなつになつたんですよ

「やうなんですか……。

やう言えば、あの近くにお庄までしたよね?」

「告別式もあるつてことですよ」

出席したといつたのがどうか。面倒なことだ。

「実はウチは途中で病院を変えたんです。

息子が産まられてすぐ。

駅前に新しい病院が出来たでしょ? そつちに移つたんですよ」

「あら、余計なこといつたやついましたかねえ。

あそこの先生、ホントに良い人だったんですけどねえ」

「いえ、先生が良くなかったって訳じゃなくて……。

まあ、ちょっと心配になつたつていうのがあるんですけど……」

俺が言葉を濁すと察したよつに管理人さんが続けた。

「もしかして、ちょうどあの火事の頃でした？」

「やうなんです。

そういうことで、あの病院にはあまりいい印象が無いんですね」

「じめんなさいね。変なこと思い出せせて。

でもかばう訳じゃないんですけど、あそここの先生はホントに良い先生でしたよ。

あたしも子供もずっとお世話になつて。

でもやつぱり古い病院でしたからねえ。

その気になれば変な人でも誰でも入つてこれたかしらねえ。

あの時まで何もなかつたのが不思議なくらいで。

今時はマンションだってそうでしょう？

セキュリティのしっかりしたところでないと、安心して住めない

じゃないですか。ここみたいに。

そういうえば、あのときの犯人もまだ捕まつてないみたいですよねえ。

でも、ホントに嫌な世の中になつたもんですよ。

病院に放火だなんて。その隙に赤ちゃんを誘拐だなんて。

あたしが若いときには考えられなかつたですよ。ホントに

その夜久しぶりに母の夢を見た。

昼間、母と火事という2つのキーワードを聞いたせいで。

北野医院での火事と俺の母、この2つは俺の中まだつながつてい

る。

和子には内緒にしていたが、父の死後、俺は一度だけ母と会つて  
いた。

あれはちょうど歩が生まれた日。  
予定日より早い出産で、俺は単身赴任先だった。  
連絡を受け、一旦マンションに戻り病院に行こうとしていた時、  
突然母がやつて來た。

「……なにしに來たはないでしょ？？

お焼香に來たのよ。お父さんの」

父が亡くなつたのは半年以上も前だ。  
葬式にも来なかつたくせに。いまさら。

父の葬式から続く、引越し、出産、それに単身赴任のせいで、当  
時の負担はかなり大きく、俺には余裕が無かつた。

母は相変わらず派手な下品な装いで、この平和な新築マンション  
とはまつたくそぐわない。

俺は濃い化粧の匂いが真新しい清潔な玄関に染み込んでいくよ  
うな気がして耐えられなかつた。

この女が自分の母親だなんて。

「なんて言つていいのかわからないんだけど……」

こちらの機嫌を伺つよつてへらへら笑つていながら母は言つた。  
その様子を見て俺は、母がまた金をせびりに來たのだと直感した。  
亡くなつた父の代わりにこの俺から。  
内心かつとなつたが、まさか殴りつける訳にも行かない。  
怒りを押さえ、しかたなくいくばくかの現金を用意して、玄関先  
で封筒を押し付けた。

「「」これで用はすんだろ？ 早く帰れよ」

「そんなつもりじゃ……。

あんた、子供できたんだって？」

「……だから聞いたんだよ？」

「なによ。おめでとうへりこ西わせでよ。いつ頃生まれるの？」

「……」

今朝生まれたばかりだと言えなかつた。言いたくなかつた。

「教えてくれないの？」

でも、病院は北野さんのところなんでしょう。  
あそここの近くで見たのよ。和子さんを

じきつとした。

弱みを握られたような。大切に隠していたものを探られたような。  
俺はきつと嫌な顔をしていたと思つ。  
それを見て母の目が細まつた。  
年のせいか薄くなつてきた光彩に、ねつとりとした光が宿るのが  
見える。

俺が密かに恐れていた日だつた。

「あたしはあんたの母親なのよー。生まれてくる子はあたしの孫  
なのに！」

母のいきなりの大声に、俺はつるたえ反射的に怒鳴つていた。

「うるさい。もつあんたには関係ない！」

帰つてくれ。早く帰つてくれ」

「……」

初めてだった。母に對して大きな声を出すのは。

母も驚いて口を開けたまま黙つた。

そしてなにも言わず萎れたように玄関を出していく母の背中を見ながら、俺は後悔した。

なんでもつと上手くやらなかつたのだろう。

それは母がかわいそつだからという思いで無かつた。

母はこのマンションのことも、和子が北野医院に通院していることも知つてゐる。

その気になれば俺がいなときいつでも会いに来れるのだ。

わざわざ心配の種を作るような真似をしてしまつたような気がした。

それから一週間して北野医院で火事があつた。

和子と歩は退院した後で、単身赴任先に戻つていた俺はそれを聞いたとき母の目を思ひ出した。

あの時母が見せた目。

幼いころ俺の恐怖の対象だった目。

自分の思い通りに行かないとヒステリックに叫びだすときの母の目。

目。

父との喧嘩の中で、台所から包丁を持ち出したときの母の目。ある一点を超えるとなにをしでかすかわからなかつた母。もしかしてあの火事は……。

あの母ならやりかねない。

そう思えてならなかつた。

それを裏付けるかのように、あの日以後母とは連絡が取れていな

い。

その後俺はときどき悪夢に悩まされたようになった。

誰もいない深夜の病院。

火を見つめる母。

泣き叫ぶ赤ん坊たち。

赤く燃え上がる炎。

嫌な悪夢だつた。

バタバタバタ……。

まだだ。

今朝もまたあの声が聞こえた。

急いでベランダに出て辺りを見まわしたがなにも見えない。

そしてやはり遠くなつていいく羽音だけが残つていた。

……こんなに視界がいいのに。気のせいなのだろうか。

あの声。

男とも女ともつかない。年寄りのような、若いような。

でももし、本当に鳥が喋つているんだとしたらインコかオウムの

類なのだろうか。

俺は、どこからか逃げ出したカラフルな鳥がベランダにいる光景を想像してみた。

違う。なにか違う感じがする。

いつも窓に背を向けてるので実際に鳥の姿は見ていない。

でもそんな小さな鳥ではないような気がする。

もつとずつと大きな、羽を広げると俺が飲み込まれそなぐらいの大きな黒い羽の鳥……。

ばかな、そんな鳥、いる訳が無い。

「どうしたの、あなた？」

「」の間から、ベランダに出てばかりいて

和子が心配そうに声をかけてきた。

「いや、なんだか、カラスでもいたような気がして」

「カラス？ 嫌だ。この辺りにはいないって聞いていたのに。これからは気を付けなくちゃ。あなたも窓に開け放しにしないようにして下さいね」

「そうだな。

……ああ、そういうえば北野病院の先生、亡くなつたらしいぞ」

「管理人さんが言つてたわね。いい先生だつたけどね」

「そうか？ あまり覚えていないなあ。

年寄りの先生で、大丈夫かこの人と思つたくらいだ」

「腕は確かだつたわね。」こら辺りでは評判だつたし。あんな事さえなければねえ」

「あの火事のときは一人で大変だつたな。偉い騒ぎだつたんだろ？」

「私だつて退院したばかりでずっと家にいたから。全然気が付かなかつたのよ。

このマンションからは遠いじゃない。あの病院は。翌朝テレビで見て初めて知つたのよね」

「まあ、お前と歩が退院した後だつたつていうのは運がよかつたな。

でも、まだ見つかっていないんだる。連れ去られた赤ん坊。もし死んでるなら死体だけでも出てきた方が、諦めも付くのになあ」

「酷いこと言つわね。

何年立つてもやつぱり生きているつて信じたいものじゃない？ あの人達の気持ちを考えると

「知つてゐる人だつたのか？」

「そりやあ、同じ時期に同じ病院で子供を生んだんだから少しば話もしたわよ。

確か、ご夫婦とも弁護士さんで」

「そりなんだ。親が金持ちだつていうのを知つて誘拐したのもなあ。

それにしちゃ身の代金の要求も無いみたいだし……。

歩も大きくなつたとはいつてもまだまだ保護が必要な年なんだからなあ。

「氣を付けないとけないなあ」

「いまさら遅いわよ」

仕事にかこつけて、歩の教育も安全もすっかり和子に押し付けてしまつてゐる。

愉快でない不妊治療を経て、結婚7年目にしてようやく授かつた待望の男の子。

和子の計画では本来なら2年目で、二十代の内に子供を一人作つ

ておくはずだつた。

だから妊娠がわかつたときは本当に一人して涙を流して喜んだ。  
それから出産までだつて平坦な道のりではなかつた。

流産しかかつたこともあつたし。

医者からは生まれてくる子に障害が残るかもしないと警され、  
本氣で悩んだ。

でも、和子は生むことを主張し、歩は立派に育つてくれてゐる。  
父の死後、このマンションの購入を望んだのも和子だ。  
妊娠中だつたにも関わらず有名な私立小学校に入学するため、そ  
の沿線に引っ越した。

俺は落ち着いてからの方がいいのではと何度も和子に注意したの  
だが、生んでしまつたら当分そんな時間は無くなるからと、予定日  
を目の前にして引っ越しをしたのだつた。

この家の主人として情けない氣もするが、和子の計画に間違いは  
無いみたいだつた。

このマンションの購入も、歩の教育にしても。

「カラスですか？」

管理人さんは信じられないよつた。

「見たんですか？」

「いや、見た訳じやないんですよ。

ベランダに大きな鳥がいたような気がして。  
カラスかなあとつて」

「そうですか……。

でもこの辺りにはカラスは出ないはずなんですねえ。

カラスは高い木や鉄塔に巣を作つてそこに中心に一百メートルくらいの縄張りから動かないんですよ。

ここはほら、近くに森も鉄塔もないでしょ？

カラスは来ないはずなんですけどねえ

「ずいぶんお詳しいんですね」

決して侮つていた訳ではないが、この初老の女性の以外な一面に驚いた。

「いえね、全部主人の受け売りなんですけどね」

「」主人さんの？」

「ええ、主人は長年保健所に勤務してましてね。

今は引退して、カラスとか鳩とか、ああいつた街暮らしの鳥のことと趣味で研究してるんです。

ホントになにが楽しいのか、

毎朝夜が明ける前からいそいそ出かけていってますけど」

「はあ、そうなんですか。

でもつらやましい。お好きなことに熱中できるなんて」

「まあ、これまでずっとまじめに働いてもらつたし。

なんでも好きにさせてあげたいとは思つてるんですけどねえ。

でも家の中までカラスの死骸なんかじこまれちゃあ、ホントにたまつたものじやないですよ」

管理人さんは眉を顰めてはいたが、それでも口元は笑っていた。

何日経った日の夕方、マンションの入口で声をかけられた。  
夕方の光の加減か、丁寧に化粧をして上品な着物を着た婦人が誰  
なのか、最初はわからなかつた。

「いやだあ。わかりません？ あたしですよ」

「ああ、管理人さんでしたか。すいません気が付きませんで」

慌てて頭さげる。

管理人さんの隣りには、仕立ての良いスーツを着た同じくらいの  
年齢の男性がいた。

「いらっしゃる主人です。いらっしゃる富沢さん」

「いつも家内がお世話になつております」

見たところずいぶん知的な感じのする人だつた。

「いえ、いらっしゃるそ、お世話になつてます」

「今日はこの先にある知り合いの夕食に招かれてましてね。  
それで……あ！ ちょっと待つてて。あなた。  
井上さんがいる。部屋の灯りが点いてるわ。  
2日前から荷物あずかつてなかなか渡せてなかつたのよ。  
ちょっと行って荷物だけ渡してくるから。

ホントひょつと待つてて、お願ひ

「主人の返事も聞かず、言うが早いか、管理人室の鍵を開けて着物姿のまま荷物を取り出すと、管理さんは一目散にエレベーターに乗つて行つた。

後には管理さんの「主人と俺が一人残されたが、じゃあ、と言つて立ち去るのも具合が悪く、俺は井上に成り代わり彼に頭を下げた。

「すみません。時間外にお仕事をさせてしまつて」

「いえいえ、あれの好きにさせて下さい。  
家内は人の世話を焼くのが好きなんです。  
子供たちももう皆独立してしまつて、世話を焼く相手が欲しいも  
んだから、ここで働かせてもらつてるんですよ」

管理さんはすぐには戻つてきそうになかった。

「そういえば、奥さんから聞いたんですが、ご主人さんはカラスの研究をなさつてらつしやるんですか？」

「研究なんていう立派なものじゃなくて、単にじつくり観察して  
いるだけなんです。

現役の時はそりやあアイツらに泣かされたもんんですけど、よくよ  
く見てみると、意外と可愛いところもあるんですよ」

「自分の好きな事だけに時間を使えるなんて本当にうらやましい  
ですねえ。

……あ、それで一つお伺いしたいことが有るんですが

「なんでしょう、私にわかる」としたら

「カラスは喋りますか？」

「はつ？喋る？カラスが？人間の言葉をですか？」

馬鹿なことを聞いてしまつただろうか。

沈黙つぶしの会話のネタにしておこう。ぴょぎぬ。

「すいません。変なことを言つてしまつましたね」

「ああ、いいえ。そんなことは無いですよ。

カラスは声帯も発達してますから、聞き間違える」ともあると思  
いますよ。

ああ、そういうれば家内が言つてましたね。カラスを見られた住人  
の方がいらっしゃつたつて

「はい、私は

でも見た訳じゃないんです。大きな羽音と、それと、人の声のよ  
うなもの聞きました

「ほう、なんと言つてましたか、アイツらは？」

「ええつと、『いつまで、放つておくんだ』とか……」

それまでにこやかだった彼の顔からすりつゝと色が覚めるように笑  
顔がなくなつた。

「今なんとおつしゃいました？」

なにかまずいことを言つてしまつたのだろうか？

「いえ、あの、多分、聞き間違いなんで……」

「いつまで、と、その鳥は言つてんですか？」

「え、ええ、そう聞こえたんです」

「そうですか……」

彼はなにかを考える顔になつた。  
どうしたんだろうと不安に思つてゐると、エントランスの自動扉  
が開き管理人さんが戻つてきた。

「あなた、お待たせしました。  
ああ、富沢さん、主人の相手させてしまつてホントにすいません  
でした。

さあ、いきましょう。

どうしたんですか？あなた？」

彼は我に返つたように自分の妻を見た。

「ああ、そうだな。いや、失礼しました、富沢さん」

お互い軽く礼をした。そのままオートロックの操作をしようと俺  
は一人に背を向けた。

その背中にもう一度彼が声をかけてきた。

「失礼ですが、富沢さん。ご両親は？」

「両親ですか？父はもつづくなつてこなか」

「お母様は？」

「母は、……母は、もともとこまかん」

「ああ、すいません。とんだことをお聞きしてしまいました。失礼な質問続かで申しわけないですが、お父様の「供養はむつおみで？」

「わからぬです」

「もうですか。ううですよねえ

……いや、本当に失礼しました。

立ち入ったことをお聞きして、申し訳ないです」

「いえ、父の供養がどうかしましたか？」

「ちよつと馬鹿な」と思い出してしまいました。

いや、なんでもないんです。恐れて下わす。今のじとせ。それで

は

謎めいた言葉を残して、彼は去つていった。

それからもあの鳥はたびたびやつてきた。  
正体を見極めようと窓を見てこるとそれはなぜか絶対にやつてこない。

どんなに急いで振り返っても影すらみえない。  
いつも残るばさばさという羽音。そしてあの声。

あの鳥の目的はいったいなんなんだろうか。

声をかけてくるばかりでそれ以上はなにもしようとしてこない。

なぜ、俺の前だけにしか現れないのか。

和子はまったく気づいていない様子だった。

そしてその点が、このことを俺が他人に相談することをためらう理由でもあった。

もしかしたら、あの声は俺だけにしか聞こえていないのかもしない。

いや、実際はまったく声なんか聞こえないのかもしねり。

俺の耳が、頭がおかしくなっているのかもしねり。

そう思いはじめるときくて誰にもずっと相談出来なかつた。

いろいろ悩んだ末に、そうだ隠しカメラを仕掛けてみようと思いついた。

結婚前に使つていたビデオカメラを押し入れから見つけ出し、操作の仕方を思い出しながら、空きのテープを物色している最中。思わずぬ画像に再会した。

……こんな所に残つていたなんて。  
俺はカメラに付いている小さな画面に見入つた。

画面の中では、生まれたばかりの歩が和子に抱かれている。

本当に生まれてすぐの時で、病院のベッドで撮影したものだ。

この時期の、生まれた頃の歩のビデオテープはもう無いものと思つていた。

あれほど用心深い和子のほとんど唯一の失敗。

撮影器材の鞄をマンションの玄関先にうつかり置き忘れていたところ、ちょっと田を離した隙に、全部持つて行かれてしまつたといふ。

器材自体は新しいものを買うことが出来るが、既に撮つていたテープも持つていかれた。あれを盗られたのが痛かった。

……こんな所に残つていたなんて。

あの時、そういえば一回だけ間違えて古いカメラを持つていつたことがあった。

自分でもすっかりそのことを忘れていたが。カメラの中に残つていた画像はほんの5分くらいのものだつたが、本当にうれしくなるような映像だつた。

夢中になつて何度も再生していると、ふと背後に人の気配を感じた。

「どうしたの、これ？」

和子が立つていた。

和子は、荷物を出しつぱなしにしていた押し入れを見て青い顔をしていた。

「ああ、和子。見ろよ、こんなところに残つてたぞ。少しだけだけど、ほら、お前も見てみろよ」

喜んでくれると思い、笑いながら言った。  
しかし和子は青い顔のまま叫んだ。

「そんなこと聞いてない。これはどうから出したの？」

「えつ？ ああ、押し入れから……」

「……あなたつて人はいつもそう。  
あれほど勝手に触らないでつて言つてゐるのに、どうしてわかつてくれないの？」

なぜか和子は涙を流し始めた。

「おい、おい、どうしたんだ、泣くことないじゃないか、悪かったよ。もう勝手に押し入れ開けたりしないから。でもほら見ろよ。歩が

「都合の悪いときだけ歩のことを持ち出さないで！歩、歩って、あの子のことなんにもわかつてない癖に！私がどれだけ苦労してるか知らない癖に！」

「……そんな言い方はないだろ？」「

俺の方もむりときて黙り込んだ。

和子は肩を震わせていつまでも泣いていた。せつぱり訳がわからなかつた。

「高沢さん、こんばんは」

「ああ、これは、どうもこんばんは」

視線を上げると見た顔があった。

管理人の「ご主人だ。

そういえば管理人の名字はなんとこののだろうか。何と呼びかけたらいいのかわからない。

「どうしたんですか？こんな所で」

俺は帰宅途中マンション隣りの公園のベンチに座っていた。

気が付くとも「すっかり辺りは暗くなっている。

「もうこんな時間でしたか。  
ちょっと考え方をしていまして」

「どうかされたんですか？」

彼は隣りに座ってきた。

なんでもありませんとそのままおうと思つたが思い直した。

「あの、実は少し悩んでいまして。  
よかつたら話を聞いてもらえないませんか？」

「私で」相談に乗れますか？」

「実は些細なことから妻とケンカしてしまいました。  
ちょっと悩んでいたんです。妻の気持ちが分からなくて」

俺は昨夜の顛末を話して聞かせた。

「それで、私には妻の気持ちがどうしても理解できないんです。  
普通は無くなつた写真が見つかったらよろこんでくれるものでしょ？」

「うーん。そうですねえ。  
もしかしたら奥さんは毎日の家事で疲れてうつしやるのかもしねいですねえ。

でも、あまり深刻に考へる」とはないと思います。  
まあ、言つてはなんですが、良くあることでしょう。  
とにかくあなたの方は悩まずに笑つて謝つておけば大丈夫だと思

いますよ。

笑つていれば深刻なことも小さなことになりますからねえ」

「そんなものでしようか？」

「だといいんですけど。

……まったく管理人の「夫婦がつらやましいですよ。  
お互いのことをよく理解してらっしゃって」

「……そう思いますか？」

「どうこの意味ですか？」

「本当につらやましいですか？　わたしたち夫婦が」

「……はい。だつてとても仲の良い「夫婦で」

「仲はいいですよ。それに先程おつしゃられていたように。

お互いのことをよく理解しているといつのも間違つてはいません。  
ただ……」

「ただ？」

「富沢さんは、なぜ私が退職しても家にあまりいなかつたり、家  
内は管理人で外に働きに出ていると思いますか？」

「……？」

「いつも一緒にいないことで、お互いの嫌なところを出来るだけ  
見ないようにしているんですよ。

たぶん私たち夫婦はお互いのことを理解しすぎているのかもしが

ませんね。

理解しているから、お互いの弱点も良く知っているし、お互いの行動も生活もわかつている。

だからどうすればお互いの嫌な部分を見なくて済むかもわかつているんです。

実は私たち夫婦は家ではほとんど会話は無いんですよ

「そんな」

あのおしゃべりな人が。

「本当にです。でもだからといって仲が悪いといった訳ではないんですよ。

どんなに良く見えても、悪く見えても家族というのは端で見る分には本当のところはなにもわかりません。

どんな家族であれ、良いところもあれば悪いところもある。みんなそうなんですよ。

夫婦を長く続けていくには、そういう良い部分も悪い部分も同じように受け止める、清濁併せ呑むといふことが必要なんだと思想ですよ。私は。

訳のわからないことも、理不尽なことも、その理由や原因を全部追求する必要はないんです。

家族の間では、ただそういうことだと受け止めればいいんだと思います。

……ああ、すみません。えらそつて説教なんかしてしまいました

「いえ、本当にありがとうございます。だいぶ気持ちが楽になつてきました。

……そういえば、先日、両親の供養つていうのはなにか意味があつたんでしょうか？」

「

とたんにそれまで流暢だった彼の言葉が止んだ。

「あの鳥のことはとにかく関係があったのかなあ、と想つて」

「まだ、来るんですか？ その鳥は」

「いえ、もう来ません。やはつ氣のせこだつたんでしょう。多分

俺は嘘を付いた。本当のことをつべと彼がそれ以上喋つてくれない気がした。

「そうですか。そうでしょうな。

いえ、あなたの話を聞いて思い出したのは、カラスのことはないんです

「では、なんだつたんですか？」

「……こつまで

「いつまで？」

「そう、以津真天、です。ああ、こんな字を書きます。

鳥じやありません。妖怪なんです。  
なんのことはない。私はあなたに馬鹿な話をしちまつたんです

。あ

もつれて下さる。

「妖怪ですか？」

「そうです。なんでも血の繋がった人が亡くなつた後いつまでも供養されないでいると、『いつまで放つておくんだ』と、残された親族のところに言ひこぼれる鳥のよくな妖怪だそうです」

またあの夢を見そうだつた。あの赤い悪夢を。

管理人さんのご主人の話を聞いて最初に思つたのは、母のことだつた。

行方のわからぬ母。

もしかしたら、母はどこかで亡くなつてゐるのかもしぬれない。  
それをあの鳥が伝えに来てくれてゐるのかもしぬれない。

……馬鹿馬鹿しい。なにを真に受けているんだ。妖怪だぞ。妖怪。  
でも、もしあの話が本当なら、母は既に死んでいて、しかもその死体が見つかっていないことになる。

母が事故や病氣で死ぬことがあつてもおかしくはないが、それだつたら死体は発見されてゐるはず。

どこかで死んでまだ発見されていないというのは、つまり事故なんかではなく、例えば、どこか誰もいないところで覚悟の上で、自殺をしたとか……。

いつたい何を考えているんだ、俺は。

しかし消そうと思つても頭の中に鮮やかな妄想が浮かんでくる。  
妄想が繋がつていく。

真つ赤に燃え盛る火。

その火の中、赤ん坊をしつかり抱えて走る女。

赤く照らし出される女の顔は、母だ。

そして自殺してまだ見つかっていない母の死体。その足元に赤ん坊の死体。

母が俺の子だと信じて盗んだ赤ん坊の死体。

……そんなこと、ある訳がない。

「最近家の中の歯車はあまり上手く回っていない。

夕食の時も、いつもは歩を中心て会話が転がっていくのだが。いかんせん、和子は押し入れの一件をまだ根に持っているようだつた。

俺は俺で、母のことに囚われていた。

テレビの壇だけが流れる食卓に、歩もさすがになにかを感じたらしい。

食後一緒に風呂に入ったとき、おやおやや俺に尋ねてきた。

「ねえ、お父さんとお母さんはケンカしてるの？」

その切羽詰つたような声を聞いて、俺は自分を取り戻した。歩は歩なりに何かを感じ取つて、自分に出来る範囲で家族をなんとかしようとしている。

それなのに、まったく俺は何をやつているんだろうか。

俺は自分が歩くらいの年だったときのことを思い出した。すでに家族はめちゃくちゃだったが、俺はそれを馬鹿な母や無力な父のせいにして、自分からほなにもしてこなかつた。

家族に背を向けたのは自分も同じなのに。

そしてまた俺は同じことをしようとしているのではないか。

「「めんな、お父さんが下手で、お母さん怒っちゃたんだよ。でも大丈夫。すぐ仲直りするから

それを聞いた歩は安心して全身でホッと息をした。

本当に良い子だ。

まだ6歳だといつのに家族のことを心配したり、受験勉強を文句も言わずにこなしている。

俺には出来過ぎた息子だ。

俺にはこの子を守る義務がある。この家族を守る義務が。母が例え火事や誘拐の犯人であつたとしても、俺はこの家族を守つていかなければ行けないのだ。

どんな理不尽なことでも、訳のわからないことでも。

俺は全てを受け入れ、この家族を守つていかなければ。そう覚悟を固めていた。

母から突然電話があつたのは、4月最後の日曜日の午後だつた。

「どうしてこれまで連絡しなかつたんだよ」

電話を取つたのは俺だつた。

和子はリビングで歩の勉強を見ている。

「「ごめんね。突然電話して」

母の声は「なんだつただろうか。

こんなに落ち着いて喋る人だつただろうか。

「もう、7年も経つからいいかなと思つて電話してみたんだけど」

「心配したんだぞ。引越ししたんなら連絡先へうご教えろよ」

俺は内心ほつとしていた。

同時にここ最近思いつめていたことだが、急に馬鹿馬鹿しく思えてきた。

もしかしたら、和子ではなく俺の方こそ疲れているのかも知れない。

「実はね。今だから言ひなご。お父さんが亡くなる前、約束させられたのよ。あんたに内緒でね」

初耳だった。

「お父さん、あんたのこと心配してたね、『俺が死んだらお前に金を融通してやる奴はいなくなるだらうな』、あいつにだけは迷惑をかけてくれるな。あいつには子供もできるんだからって』って。もうあんたに会わないことを約束させられたのよ。

……あたしもびっくりした。

あの人があんなこと考えていたなんて、思つても見なかつた。だけどそれも仕方ないね。

父さんが亡くなつた後、それでも一度だけあんたに会いにいつたわね。

覚えてる?

まさかそこまで嫌われてはいらないだらう期待してたんだけど、甘かつたわね。

お父さんの言つたとおりだった。

これまで嫌な思いをせて『ゴメンね。

でも安心して、もうあんたに迷惑かけるよつなことは決してしないから

母は自分が今いる場所を告げた。

病院だった。俺も名前を聞いたことのある病院だ。たしか末期癌患者の終末医療で有名なホスピスとして。

「あんたにはもう連絡しないつもりだつたんだけど、看護婦さんにどうしてもつて連絡先を聞かれてねえ。

もし、あたしが死んだら連絡がいくかも知れないけど、そういうことだから」

「……見舞いにいくよ」

なんと答えたらいか迷つてゐる内に、自然にそつと言つてゐた。

「いいわよ。大丈夫だから」

母は笑つていた。乾いた笑いだつた。

「どうしちだよ。それに孫の顔だつてまだ見ていないだろ?」

「……見たわよ」

「え?」

「……神様つているのかもね。

あたしが前住んでいたアパートの近くで、ほら北野さんのところで、火事があつたでしょ?」

野次馬で見に行つていたら、ちよつと和子さんと会つたのよ。赤ちゃんをしつかり大事そうに抱えてね。

あたしはそのときすっびんだつたから和子さんは氣が付かなかつたみたいだけ。

しばらく赤ちゃんの隣りで並んで火事を見たわ。

……名前はなんてつけたの、あの子?』

「歩だよ。息子だ」

「そう、良い名前ね」

母はそれ以上なにも言わずに電話を切った。

電話が終わつた後、俺は混乱していた。どうしていいかわからず。母が、あの母が死のうとしている。

そんな自分を和子や歩に見られたくなくて和室に隠れた。

その時、背後で羽音が聞こえた。ぱさぱさと。

こんな時になると、舌打ちが出る。

どうせ声だけの幻。

『今まで、放つておくんだ』

こんな言葉になんの意味もない。

だって、母は生きていたんだから。今は生きているんだから。

しかし、この口はそれだけでは終わらなかつた。

『……おとうさん』

もう一言、消えるような小さな声で付け加えられた。

もしかしたらこれまでにもその言葉は続けられていたのかもしない。

俺が聞き取れていなかつただけで。

振り返ったがいつものようになんの影も無く、ただ遠くに飛び去つて行く羽音がかすかに聞こえるだけだった。

バサバサバサ……。

おとうさん。

そう。確かにあの鳥はそう言つた。俺のことをお父さんと。なぜ、あの鳥は俺のことをお父さんと呼んだのか。俺のことをそう呼べるのは歩一人のはずなのに。不意に赤い妄想がまた湧き上がってきた。

なにを考えている。俺は、いついたいなにを考えようとしているんだ。

さつきの母の話の中で感じた違和感。

火事を見ている一人の女。

一人は母で。もう一人は和子。赤ん坊をしつかり抱えた和子。……和子は、北野医院で火事があつたとき、わざわざ見に行つていた。

生まれたばかりの赤ん坊を連れて。あんな遠くまで。家にいて知らなかつたと言つてたはずなのに。

赤い妄想がどんどん繋がつていく。

真つ赤に燃え盛る火。

赤ん坊をしつかり抱えた女。

照らし出される女の顔は母ではなく、和子の顔になつていた。

急に目の前の現実感が無くなり、足元がふらついた。

立つていられなくつて、押し入れの前に座り込んだ。身体が思うように動かなかつた。

でも反対に、頭の中ではぐるぐるところんな言葉が回り出している。

ものすごい勢いで。ぐるぐると。

『お父さん』、『血の繋がった肉親』、『死んで供養されていない』  
い』

『開けてはいけない押し入れ』、『誘拐された赤ん坊』

『弁護士の両親』、『お父さん』

『いつまで』、『いつまで放つておくんだ』

『押入れの近くにいるときだけ来る鳥』、『俺にだけ見える鳥』

『無くなつた映像』、『出てきた映像』

『青ざめる和子』、『歩』

ああ、歩が授かったとき、どれだけ喜んだことだらう。

和子も俺も嬉し涙が止まらなかつた。

そして将来障害が出てくるかも知れないと医者に言われたときのあの絶望。

でも、生むと和子は言つてくれた。

全ては和子の計画どおりに。

『計画』、『和子の計画』

キツチンで歩を抱きながらあやす和子は本当に今も幸せそうである。なにを考えているんだ。歩はもう小学校に行くんじゃないのか。

『いつまで放つておくんだ。お父さん』

……なあ、和子。

お前は歩を愛しているよな。

俺達一人の子供を愛しているよな。

例えその子に将来なにかの障害が起つる可能性が高かつたとしても、愛してくれるよな。

なあ。

他の優秀な親の子ビもと取り替えたりなんて、していいないよな。  
なあ。

俺達の本当の子を殺して押し入れのどこかに隠しているなんてこと  
ではないよな。

なあ。

どんな家族にも秘密はありますよ、と最近だれかに言われたこと  
を思い出す。

だけど。だけど。

リビングから和子と歩が、和子とあの子が楽しそうに話している  
のが聞こえる。

俺は一人押し入れの前にしゃがみこんでいる。

父は死んだ。母も死のうとしている。そして俺の息子は。

……疲れているんだ。きっと。

だからひどいことを思い付くんだ。そうに決まっている。

窓から見える春の空は雲ひとつ無い晴天で、和室には暖かな日差  
しが溢れていた。

でも寒い。なぜか寒い。何でこんなに寒いんだら?

手がぶるぶると震えている。どうしようもない。

その震える手を押さえて、俺は押し入れを開けようとした。  
でも、どうしても開けられなかつた。

どうしても、開けられなかつた。

年明けに亡くなつた母のことで受験の時期はいろいろ忙しかつた  
が、歩は頑張つて第一志望の小学校に見事合格してくれた。  
和子も一生懸命家事に教育に頑張つてくれている。  
俺は相変わらず仕事が忙しい。

そして今日も鳥は鳴いている。  
俺の背中で鳥は鳴き続けている。  
いつまでも。いつまでも。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7609d/>

---

いつまで

2010年10月10日01時59分発行